

<p>プラスチック製品 インサート</p>	<p>私たちの生活に欠かせないプラスチック。 軽く、安くて、丈夫なため、様々な製品に利用されています。 しかし、軽いということは簡単に拡散しやすいということ。安いことは大量生産大量消費されてしまうということ。丈夫ということは分解しにくいということなのです。 今回はプラスチックゴミによる海洋汚染問題について迫ります。</p>
<p>映像：海岸ごみ拾い</p>	<p>2022年9月、石狩市で行われた海岸ゴミ拾いには、小学生や留学生なども集まり、総勢240名が参加しました。 軽トラックの荷台がいっぱいになるほどのゴミが1時間半で集められ、大小様々なプラスチックゴミがありました。 主催した「北海道海浜美化をすすめる会」は、「命の故郷、海！北海道の海辺を日本一美しく」というテーマのもと、20年以上にわたって海辺の清掃活動を行っています。</p>
<p>北海道海浜美化をすすめる会 中根恵美子氏</p>	<p>「ああみんなで作ってくれて良かったなって。地球が喜んでるなって。海がありがたいって言ってるなっていう風に思います。」 「日本のゴミは「太平洋ゴミベルト」に乗ってハワイのミッドウェー諸島の方に溜まっているんですね。私たちは外国のゴミが日本にきていると思っていますけどもそうではないわけです。（だから）ハワイの方々が日本のゴミを捨てくれるんだから、こちらでもアジアの人達も一緒にインターナショナルで海岸のゴミを拾うことが大事だと思いました。」</p>
<p>イタンキ浜（写真）</p>	<p>この前に行われた洞爺湖町やイタンキ浜での清掃でも、たくさんのプラスチックゴミが集められました。 石狩浜だけでなく、全道様々な海岸でプラスチックゴミが問題になっているというのです。</p>
<p>映像：積丹の海</p>	<p>「積丹ブルー」として綺麗な海で知られる、積丹半島。 ここでも、プラスチックゴミは問題となっているのでしょうか？</p>
	<p>ダイビングショップを経営する、藤田さん。 積丹の海を活動拠点に、45年にわたって道内外の海に潜り、地球の環境を海の中から観察し続けてきました。</p>
<p>ZEMHOUSE 代表 藤田尚夫氏</p>	<p>「やはりプラスチックはかなりあると思いますね。」大体ゴールデンウィークから海岸線ずっと船で（ゴミを）拾って歩いているけど、これ山盛りになりますよ。1回行ったらとんでもない量拾いますよね。 「あそこにある赤いのかあるでしょ。あれも全部拾ってきたやつ。漂着したやつ。あれ重いんですよ。男3人がかりで船にのっけて。あのタイヤもそう。」</p>

	<p>「トドに関しては数年前に、何個体かな…6個体くらい、体力がなくなって上陸して間もなくこうなって。見るとここにバンド。アシカ類って輪の中にくぐりたいんですよね。PPってポリプロピレンの荷造りバンドがあるじゃないですか。平べったい。それがわっかになったまま流れてきたものに首を突っ込んだんですよ。毛がね、一方（の流れの）毛のものだから、泳げば泳ぐほど入っていくんですよ。それが気道を締めて、衰弱。」</p>
	<p>さらに、プラスチックゴミが海の生物に危険を及ぼしている事例があります。2018年8月、神奈川県鎌倉市の由比ヶ浜海岸に餓死して打ち上げられたシロナガスクジラの赤ちゃん。胃の中からは、3cm四方のプラスチックが見つかりました。泳いでいる間に飲み込んでしまったようですが、それだけプラスチックが海に漂っているという事を物語っています。</p>
・グラフ	<p>2019年の統計では、日本のプラスチックごみ排出量は約850万トン。一人当たりから発生する容器包装プラスチックの量は、アメリカに次いで世界第2位の多さです。さらに、その内の約40%が使い捨てプラスチックです。</p>
道路脇に散乱するゴミ (映像)	<p>海にプラスチックが浮遊する原因は、浜辺でのポイ捨てだけではありません。海洋プラスチックゴミの7割から8割は街中で発生したものとされています。街中で捨てられたプラスチックが水路や川から流れ出し、やがて海にたどり着いているのです。</p>
	<p>それでは、海につながる川の汚染状況はどうなのでしょう。北海道の河川や湖沼の水環境の保全のために調査や研究を行っている、エネルギー・環境・地質研究所の永洞さんにお話を伺いました。</p>
環境地質エネルギー研究所永洞真一郎氏	<p>「実際の環境中におけるマイクロプラスチックなんですけれども、海洋などではかなり報告が上がっておりますけれども、河川水中ではまだそんなに多く報告例がありません。ある研究者は、日本全国29河川の36地点の調査結果を報告しております。そしてその結果として、河川水中のマイクロプラスチック汚染は日本国内では明らかになっております。そしてその汚染の状況というのは都市化ですとか人口密度とある程度相関があるのではないかという風に報告しています。」</p>
	<p>マイクロプラスチックとは、ペットボトルやレジ袋などのプラスチックが、太陽の紫外線や波の影響を受けて、5mm以下に細くなったものをいいます。2015年に行われた調査によれば、マイクロプラスチックは日本を含む東アジア海域に非常に多く、1平方キロメートルあたりのマイクロプラスチックの量は世界平均の約27倍にもなるといいます。このマイクロプラスチックを、私たちは飲み水、食卓の塩、そして大気などから体内に摂取してしまっています。</p>

<p>環境地質エネルギー研究所 永洞真一郎氏</p>	<p>たとえば空の 500 ミリリットルのペットボトルというのは、プラスチックの重さとして約 25 g です。これを一辺 0.3mm の立方体に作りかえると何粒ぐらいになるかお分かりになりますでしょうか？重さから計算するとおよそ 74 万粒ということになります。ですからペットボトル 1 本をポンとどこかに捨てて、それが粉々になると実にたくさんのプラスチックのかけらマイクロプラスチックになるということになります。</p>
	<p>「令和 3 年 6 月に環境省が「河川マイクロプラスチック調査ガイドライン」というものを公表しました。これは、河川水中のマイクロプラスチックの汚染をどのように測るかということを一統化しようというものです。つまり別々の方法で図られた調査結果というのは結果同士の比較が出来ませんので、これを統一した方法にしようということになります。河川水中に検出されるマイクロプラスチックというのはほぼ全量が海に流れ込みますので、海のマイクロプラスチック汚染を削減したいと言うのであれば、河川水中のマイクロプラスチックを減らすということが必要になってきます。」</p> <p>「河川中におけるマイクロプラスチックの調査方法について説明をしますと、簡単に言いますと川の表面にネットを沈めて、河川水中にあるプラスチックをこし取るという方法になります。ただ、これだけですとどれぐらいの川の水にどれぐらいのプラスチックが入っているかということがわかりませんので、ネットの中心にろ水計という装置を装着して、どれぐらいの水をこしとったかが分かるようになっていました。さらにガイドラインでは目が 0.3mm 程度のネットを使うという風に推奨していましたが、今回は北海道内の河川の水の中にどれぐらいのマイクロプラスチックがあるかということがわかりませんでしたので、より細かな 0.1mm のネットを用いました。」</p> <p>「調査結果をまとめたものがこちらになります。このように、調査地点によってマイクロプラスチックの濃度、あるいは種類が異なっています。今回の調査はあくまで一回しか行っていないので常にこういう状況にあるかどうか、もしくはこちらとこちらでは常にこちらの方が汚染が進んでいるかといったことについてははっきりしたことを言うことはできません。ただ、地点によってマイクロプラスチックの種類と言いますか形が異なっているということがわかります。」</p> <p>「今回私どもが実施した調査結果というのは、他の調査結果と比較してみますと、こういった形になりまして、まあ若干高めな結果が得られていますけれども、先ほどお話しましたように目の細かなネットを使っているのです、この結果というのは致し方ないかなというふうに考えています。」</p>
	<p>2019 年に開催された G20 大阪サミットにおいて、2050 年までに海洋ゴミによる新たな汚染をゼロとする「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」が首脳間で共有されました。 これを実現するためには、3R と言われる一人一人の実践が大切です。</p>

<p>・ 3R</p>	<p>Reduce. 使用する資源の量を少なくすることや廃棄物の発生を抑制すること。</p> <p>Reuse. 使用済みとなった商品を廃棄せずに、繰り返し使用すること。</p> <p>Recycle. 廃棄物などを原材料やエネルギー源として再利用すること。</p>
	<p>そして、私たち一人ひとりが毎日続けることができる行動として、マイボトルを持ち歩く。エコバッグを持ち歩く。ごみの分別を心がける。再利用できる製品を選ぶ。過剰に包装された製品を避ける。</p> <p>このようなことを一人一人が心がけて生活することにより、プラスチックゴミが少なくなることは間違いありません。</p>
<p>北海道海濱美化をすすめる 會中根恵美子氏</p>	<p>「私たちの消費生活の中でですね、プラスチックをゴミとしないで、プラスチックは資源であるという感覚のもとにですね、きちんと市の資源として出していきたいと思いますし、それからプラスチックの無い生活はできないと私たちも思っていますけれども、なるべくビンだとか瀬戸物だとかですね、木だとかそういうものを使って食品の保存だとかそういうものにもしていただきたいなと思います。」</p>
<p>ZEMHOUSE 代表 藤田尚夫氏</p>	<p>「色々この問題に関しては考えてきたことなんだけど、我々の行動によってそれは減らすことができる。どうやってやればいいのかと言うと、究極なんですよ、買わなければいいんです、容器を。プラスチックの容器を作り過ぎじゃないですか。あれはお金がかかっているから。中身だけ欲しいのに、その何倍ものゴミを買っているわけですよ。高いお金で。消費者がそれを拒否してくれればいいのか。買わない。これはやっぱり一人一人の意識かもしれません。」</p>
<p>環境地質エネルギー研究所 永洞真一郎氏</p>	<p>「環境問題というのは物事が複雑に絡み合い、あちらを立てればこちらが立たずということも多い。そんな時に大切なのは現実の客観的な把握とバランス感覚という言葉がある本で紹介されていました。このことを考えますと、プラスチックに汚染が進行しているとしても、プラスチック製品を全てゼロにすることはできませんので、無理のない範囲で使用量を少しずつ減らすですとか、不注意によって風に飛ばされてしまうといったことを減らしていくことによって、環境に排出されるプラスチックというものが減らされていくだろうという風に考えています。」</p>
	<p>海、それは命のふるさと。 青く美しい海や海洋生物の命を守るために、私たち一人一人が今日から行動することが必要なのです。</p>